

◇司馬遷の信念

日本の上古を切り開くのは、大陸の南や北からやって来る渡来人たちだった。それぞれが固有の宗教・伝統・風習とともに歴史・神話・伝説も引きずりながら、時には反目し、時には手を携えるなどしてこの狭い島国で生き抜き、日本の歴史をつくりあげてきたのだ。

その中国では王朝が再三入れ替わること、古い歴史を反映するはずの神話や伝説が断片的にしか残らず、しかもこつけない話が多いことから歴史事実から外されてきた。

だが、その一部が我が国にしっかりと根づいていて、記紀神話や伝承、地名、風俗・風習、さらには歴史そのものと深く結びついている。それを根拠の無いつくり話とか単なる言い伝えと切り捨てる前に、日本の古代史とどう符合するのか吟味しなければなるまい。

司馬遷の言を借りると、「総じて、上古のことを伝える書経（五帝と周の王者の言辭）や古老の伝承から、あまり離れていないものが真実に近い。それに深く思いを巡らし、心にその意を知ること、そのことが大事なのであつて、伝えられてことは決して虚言ではない」ということになる。

☆ヨーロッパでは、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』にある物語は、古代の伝説と決めつけられたが、十九世紀になってドイツの素人学者シュリーマンがトロヤの大城壁都市とともにおびただしい財宝を探しあてるに及んで、記述どおりに史実と判明した。

☆中国でも、司馬遷の書き残した『史記』『殷本記』は、神代と歴史時代を結びつけるための作り話に過ぎないとされたが、二十世紀に、王国維が甲骨文字を解読し、ついで殷の宮殿跡や陵墓が発見されたことで、「殷本記」にある事績や十数代にわたる王名が真実と判定された。これに加えて、和辻哲郎氏の説（大正九年発表）も頭に叩き込んでおこう。彼の考えが古代史の本質を大所高所から見渡していて、大筋のところでも的を射ているからだ。

「皇室の発祥が大和であったなら、畿内勢の祭器だった銅鐸は大和朝廷や皇室の祭祀・文化の中

に何らかの形で残って然るべきだが、銅鐸は山中に打ち捨てられた形で見つかる。一方、北九州系の鏡・剣・玉は皇位の印しとなり、副葬品として古墳に埋納されてきた。このことは、北九州勢が畿内勢を打ち破ったことを物語っている」

この考えの下で組みあげた本書の物語は、記紀に登場する各人の事績、『史記』・『前漢書』・『後漢書』・『三国志』など中国史書、それに古社の縁起、古記録、地名、風俗・風習、伝説・伝承、発掘結果とも概ね合致する。その中で、強調したいことが四点ある。

その一つ。戦国時代の中国で、覇権を争ってきた呉・越・韓らの末裔がそれぞれの宗教、伝統、文化、風習・風俗を背負って、わが国に渡来してきた事実を片時も忘れてはならない。

二つ目は、弥生初期に水田稲作の拡大とともに北九州の遠賀川式土器が若狭・東海地方まで広がり、そこから銅鏡・鉄刀、銅鐸、銅劍、銅矛が出土すること、出雲荒神谷から銅劍・銅鐸・銅矛が一緒に出土した事実をどう捉えるかだ。答えは、青銅祭器を崇める王朝が続いてきた名残なのだ。

具体的に言うくと、銅劍を奉る越オロチ族や銅鏡・鉄刀を貴ぶ倭国ら王朝が配下たちを各地に策封して統治した痕跡であり、その領域は伊弉諾の国生み神話にある大八洲とも重なっている。

だとすると、『前漢書』「地理志」の「楽浪海中に倭人あり 分たれて百余国となり 歳時を以て来たり、・・・」の記事は、当時の統一国家が百余国を治めたことを前提にしている、徳川三百諸侯の意味するところと同一になる。

この視点から、『後漢書』「建武中元二年、東夷の倭奴国、貢を奉じて朝貢す」に思いを馳せると、東夷の倭奴国は九州の小国奴国^なではなく、倭奴国^{ヤマト}王朝と見なすのが素直だ。ここから、稲作の始まる縄文晩期まで歴史をたどって行くと、七代にわたる王朝が浮かび上がってきた次第だ。

その三。一八〇年代、北九州糸島平野に天宮した倭奴国王朝は、越オロチ族の厳之國王朝再現

を掲げる畿内邪馬台国、王朝再興を図る日向の高天原に分裂した。互いが水穂の天神・天照大神（高志の大蛇、向津姫の入り婿）や、日神の天照大御神（天之国宗女の向津姫）を立てて争った。この時代、二つの王朝、二人の天照大（御）神が東西に並び立った。一二〇年代に天照大神が逝くと、日神は邪馬台国に遷座して女王ヒミコに立ったことで、双方の確執はとりあえず鎮まった。その四、『播磨風土記』の天日槍伝説・「垂仁紀」・纏向遺跡を通して、記紀本来の王系譜が垣間見えることだ。

1、『播磨風土記』は大己貴が播磨で彦火明を養育する説話や、天日槍と争った様子を伝える。
2、「垂仁紀」は天日槍襲来に始まり、その四代後の田道間（但馬）守の常世談義で締めくくる。即ち、垂仁の寿命は在位だけに限っても天日槍直系五世に渡り、かつ九十九年間に及ぶと記されている。そうであるなら、垂仁紀は一人だけの事績であろうはずがない。

3、記紀は、垂仁と景行が纏向（奈良県）に都したと伝える。これに該当する纏向遺跡は、邪馬台国時代最大の規模を有し、そこから出た土器は、関東・東海・北陸・中国系が十五〜二〇%も占める。しかも、この都市は邪馬台国の出現する三世紀初頭に急成長し、大和朝廷の興る三〇〇年頃から衰退しはじめた。

はつきり言うと、垂仁の事績は饒速日（『先代旧事本紀』の饒速日）と天火明（海部氏系図本系図の彦火明）の事績に、火明饒速日（火瓊瓊杵の児・火照、海幸彦、勘注系図の彦火明）のそれを連ねたもので、二人の活躍期は日神の天照大御神・天日槍・大己貴の存命時とも重なる。

火明饒速日の退位時期はというと、大和朝廷の成立直前、即ち日向を発った磐余彦（神武）が火明饒速日率いる邪馬台国（日本王朝）を滅ぼした時点にあたる。

ここから、垂仁・天日槍・大己貴・天照大御神・饒速日・火明が纏向期に生きたと悟るべきだ。